

第 33 回高専プロコンの講評

第 33 回高専プロコン（群馬大会）

審査委員長代理 大場 みち子

審査副委員長の公立はこだて未来大学の 大場みち子です。8 月にご逝去された松澤照男先生の審査委員長代理として講評を述べさせていただきます。

各出場校のみなさん、参加部門完走お疲れさまです。各部門の受賞チームのみなさん、おめでとうございます。

今回は 3 年ぶりに第 33 回群馬大会を現地開催できました。現地開催に関与いただいたみなさま、特に、主管校の群馬工業高等専門学校のご尽力に心より感謝いたします。2 年連続のオンライン開催では、各部門の参加チーム数を制限していましたが、今回は現地開催で各部門ともコロナ前の参加チーム数に戻り、大変うれしく思っています。

このコロナ禍で情報学、ICT の重要性が一層高まり、私が所属する日本学術会議の情報学の分野では、人類が生き延びるために進化する「生存情報学」の議論をしたり、理事を務める情報処理学会でも活動が活性化しています。ICT 人材の育成の側面もある、この高専プロコンの存在意義も確固たるものとなったと思います。

一方で、オンラインではない対面開催の価値は、非常に高いことを実感しました。

課題部門の今回のテーマは、「オンラインで生み出す新しい楽しみ」です。新型コロナウイルスの流行も 3 年目になり、学生のみなさんのオンライン漬けの日々の経験から産み出されたであろう、豊かで新鮮なアイデアが満載の作品たちが勢揃いしました。

私が審査員として審査した自由部門では、ほんの一瞬の表情であるマイクロエクスプレッションつまり、微表情からその日のコンディションを判定するアプリを開発したり、お遍路の姿でお遍路アプリを熱く語る学生、100 万円もするプラスチックの種別判定マシンを材料費 3 万円で作るチームに驚きました。

課題部門、自由部門で、残念だったことは、ユーザ視点で考えずに開発していたり、アイデアは良かったが実装力が伴わなかったチームがいたことです。次回、再チャレンジを楽しみにしています。

競技部門では 1 回戦で満点のチームが 2 チーム登場し、決勝でも互角で 2 チームが 1 位、

データ利用数の差で文部科学大臣賞が決まるという驚きの状況でした。競技開始後も他チームのよいアルゴリズムを参考にプログラムを改善して敗者復活したチームもありました。

ネットワークの設定などに時間を要するチームがいたとのことですが、今回のノウハウを是非、後輩に継承してください。

このような学生たちが活躍する日本の将来は実に明るい！

そして、高専プロコンこそが先進的な情報教育であり、サイバーフィジカル社会(Society5.0)で活躍する人材を育成するための、真の教育であることを確信しました。

これは、高専プロコンに尽力された松澤照男先生の先見の明があったからでしょう。

参加する方も審査する方もワクワクできる場として、高専プロコンを発展させていきましょう！

そして、来年は福井での再会を楽しみにしています。

以上で、審査委員長代理としての講評とさせていただきます。